おおよどの民俗と伝統文化

★牛と馬のトンド

２０１３年３月
奈良県吉野郡大淀町教育委員会

堪能していただけましたか？

おおよどの民俗と伝統文化

笛のひこしろう
（イラスト M.W.）

【お問い合わせ先】
〒638-0812　奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090番地
大淀町教育委員会事務局 生涯学習課（大淀町文化会館）
Tel：0747-54-2110　Fax：0747-54-2112
大淀町役場HP（URL：http://www.town.oyodo.nara.jp）

ようこそ「桧垣本猿楽」のふるさとへ

日本を代表する伝統芸能「能楽（能・狂言）」は、江戸時代まで「猿楽（猿楽能）」と呼ばれていました。
ここでは、そのうちのひとつ「桧垣本猿楽」の歴史とゆかりの地を紹介しながら、みなさんを「伝統芸能のまち・おおよど」へ誘います。

【能楽・猿楽って？】

猿楽（猿楽能）とは、奈良時代に中国から伝来した「散楽」が発展したもので、鎌倉時代に歌舞劇としての「能」と台詞劇としての「狂言」に分かれ、室町時代に観阿弥・世阿弥父子の大成したものが、今に伝わっています。江戸時代には、幕府の式楽（公式の舞踊・音楽）として珍重され、明治14（1881）年以降「能楽」と呼ばれるようになりました。また、日本を代表する伝統芸能として、2001年5月18日、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）により「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」として宣言され、現在はユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」にもとづく代表一覧表に記載されています。
奈良県はこの能楽・猿楽発祥の地として知られ、県内各地にゆかりのスポットが残されています。

【桧垣本猿楽の人々】

室町時代、大淀町にも猿楽者たちがすんでいました。もっとも古い記録として、応永11（1404）年4月1日、「吉野猿楽」が春日社（奈良市・春日大社）に参殿した記録（「春日若宮神主祐光日記」千鳥家蔵）があります。これが、のちに続く「桧垣本猿楽」の事だとされます。その後、同じ応永年中、栃原・桧垣本の猿楽者が吉野町・吉野山の神社（天満神社・勝手神社・水分神社）の行事へ参加しているようです（「当山年中行事条々」竹林院蔵）。この記録は、吉野山で活躍する猿楽者が、栃原（下市町）と桧垣本（大淀町）にいた事を教えてくれます。この頃桧垣本の地には、勅願所として後醍醐天皇が行幸したと伝える桧垣本八幡神社があり、後醍醐天皇を祭神とする神社（森神社）が応永22（1415）年に創建されたと伝えられ、いずれも桧垣本猿楽の活躍時期と重なります。以下では、その後の記録に登場する「桧垣本猿楽を担った有名人たち」をご紹介しましょう。

笛の彦四郎（彦兵衛）

文明3（1471）年、吉野にいた「彦四郎太夫」という人が、興福寺（大乗院）にいた僧侶・尋尊を訪れています（「大乗院寺社雑事記」国立公文書館蔵・重要文化財）。この「彦四郎」は、延徳3（1491）年にも東国へ向かうあいさつに尋尊を訪ねていて、雑事記ではその名に「猿楽」と注記されています。
彼はその後「彦兵衛」と改名し、笛方三流儀の芸祖とされる「笛彦兵衛」として、能楽史にその名を刻んだのでした。この「彦兵衛」の名は、その後も数代にわたって、笛方の家を継承する猿楽者たちの誇り高き通称として、受け継がれてゆきます。

▲桧垣本森神社

▲桧垣本八幡神社

▲若い男

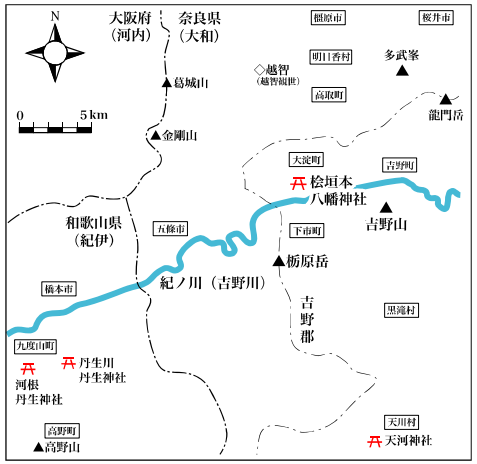
▲若い女

面打ちの七郎

明応2（1493）年には吉野山・勝手神社へ能面「若い男」が、翌年には吉野水分神社へ能面「若い女」が寄進されています（吉水神社蔵）。この能面の作者（面打ち）の名が、能面の裏に刻まれた「ヒカイモト（サルカク）七郎」です。
彼の作った能面は、他にも「泡吹悪尉」（石川県金沢市・尾山神社蔵）「獅子口」（和歌山県九度山町・河根丹生神社蔵）などが知られており、いずれも能楽史に残る傑作とされています。

吉久・国忠・国広

彦四郎の父とも伝え、美濃（桧垣本）姓を名乗った「吉久」は、観世・金春座の小鼓方を勤めました。その子とされる国忠は、能楽の名門・太鼓観世家に伝わる太鼓胴へ「観世座次郎大夫国忠 天文二二年」と銘を刻んだ太鼓の名手でもありました。その子・国広も父の芸を受け継ぎ、京都の芸壇で太鼓方の師匠として活躍し数多くの伝書を残しました。この太鼓の芸系は、太鼓観世家に受け継がれて現在に至っています。



▲桧垣本猿楽の活躍した地域と能楽ゆかりの地

【桧垣本猿楽 その後】

江戸時代、桧垣本猿楽の活躍を記した史料はほとんどありませんが、慶長12（1607）年、「吉野衆」が丹生社（和歌山県高野町・丹生川丹生神社）の宮移しで猿楽を奉納しています（「丹生川宮移入目日記事」同神社蔵）。これが栄華をほこった桧垣本猿楽にまつわる最後の活動記録となります。

▲ちびっ子桧垣本座

【桧垣本猿楽の復興】

笛や太鼓といったお囃子の芸で大活躍し、現在に連なる能楽の礎を築いた桧垣本猿楽。地元では近年まで、その存在がほとんど忘れさられていました。ところが2000年、不思議な縁に導かれ、能楽小鼓方大倉流11世宗家がこの地を訪れてささやいた言葉「私はずっと〈桧垣本〉をさがしていました。〈桧垣本〉は能楽師にとってとても大切なところです」をきっかけに、桧垣本猿楽「復興」への歯車がまわりはじめました。
大淀町では2001年以降、桧垣本猿楽を大切な文化財産として復興し継承してゆくため、「大淀町能楽プログラム」と題して、能楽の公演や、地元の小・中学生が能楽を練習し実演する「ちびっ子桧垣本座」の活動をはじめ、全国各地で伝統芸能をけいこする子どもたちとの交流会「大和猿楽子どもフェスティバル」等の事業を、地元住民・研究者・能楽師たち（能楽協会・能楽座）の協力を得ながら実施しています。
2013年2月には、念願だった「笛方三流儀の里帰り公演」も実現しました。まだまだプログラムははじまったばかりです。いつの日か「ちびっ子桧垣本座」で活動した子どもたちが能楽師となり、彼らの里帰り公演が実現したとき、はじめて「桧垣本猿楽の復興」といえるのかもしれません。

地図と写真と解説で！

おおよどの民俗をみよう

奈良県有数の大河・吉野川を南にひかえ、稲作中心の農村文化と、森林で暮らす山村文化がまじりあう民俗を、各地で受け継いできた大淀町。このパンフレットでとりあげた民俗はその代表的なものです。これを手に、各地域の祭礼を訪ねてみてください。

★イラスト：中川 未子（よろずでざいん）　★佐名伝のオカリヤ（下）と供物（上）

①トンド（大岩）　1月

１月14日の日没から15日の小正月の夜、大晦日から続いてきたお正月行事の締めくくりで、火がたかれます。これを「トンド（ドンド）」と呼んでいます。

大岩地区ではトンドの数日前、集落内の芝生のうえにトンドを据えます。高さ３m、直径1.5mほどの竹の束を作り、藤のカズラでくくります（トンドククリ）。竹の間にワラ束などを入れ、外側は倒れないように外から竹棒で支え、恵方にはしめ縄が飾られます。

夜になり、火のついたワラ束からトンドにゆっくりと火がともされ、しめ縄などの正月の飾り物や習字が火にくべられます。習字は火の粉とともに舞いあがり、高く舞いあがるほど字が上達するといいます。

こうして焚かれたトンドの残り火で、竹筒に入ったお神酒（笹酒）をあたためて飲んだり、餅を焼いたりします。

トンドの火であたためた笹酒を飲むと、一年間病気しないとか、この火で焼いた餅を食べると、歯が丈夫になると伝えられてきました。このトンドの残り火は、ろうそくでひろって提灯に移し、この火を持ち帰って神棚や仏壇のあかりにします。

かつてカマドがあったころ、トンドの残り火で炊かれたあずき粥には、特別な力があるといわれていました。

カマドがなくなった今でも、あずき粥を食べる風習は大淀町の各地区で続けられています。

大岩のトンド

②子ども相撲（岩壺）　10月

岩壺地区では、子どもを主役にした行事が体育の日におこなわれています。行事の舞台は、岩壺の氏神・葛上神社、その主祭神は剛力の神・タヂカラオです。

本殿前での神事がおわり、マワシをしめた子どもたちが本殿前の階段を降りてきて、階段下に敷かれたワラ（土俵）の上へ肩を組んで立ちます（かれらはこのとき「スモウトリ」と呼ばれます）。スモウトリの両脇には大人たちが介添えとして立ちます。そして、スモウトリの腕を取りゆっくりと回しながら、「ワッタイ、ワッタイ、ワッタイヨー！」のかけ声とともに、スモウトリの腕を高く天につきあげます。さらに「イチヨー、ジュウヨー、ヒャクヨー、センヨー、マンヨオー！」のかけ声でふたたびスモウトリの腕が高々とあがった瞬間、本殿前に並ぶ大人たちが「ハナ」と呼ばれる祝儀の包みを投げ、スモウトリを祝福します。

子どもたちの健やかな成長を見守る大人たち。ムラのつながりをいっそう深めてゆく民俗行事の姿が、この行事からもかいま見れます。

子ども相撲

③カンジョウカケ（畑屋）　12月

畑屋地区では、集落の谷口にナワを掛け渡すカンジョウカケの風習があります。かつては年始におこなわれていましたが、今では年末第３日曜日の行事となっています。

カンジョウカケに用いる道具は、東西ふたつの宮座講のトヤ（当屋：その年の行事の世話人）の家で作られる「大カンジョウ」と呼ばれるナワと「小カンジョウ」と呼ばれる飾りものからなります。大カンジョウは、２つの講で作ったナワを結びあわせ長さ50mに仕上げるもの。小カンジョウは、４本の細いナワの間にスギの葉を挟み込み、御幣をぶらさげたものです。このカンジョウナワは、長い胴体と、４本指のツメをもつ畑屋の氏神・八大竜王をかたどったかたちです。

谷をまたいでのナワカケ作業は、東西の講が力をあわせておこないます。

青空に弧を描くカンジョウナワは、新年を迎えるおおよどの風物詩です。

西の講のナワ

かけ終わったカンジョウナワ

④おたいっさんといのこ（比曽）　4月・11月

比曽地区にある寺院・世尊寺の春の会式（聖徳太子報恩大会式）は4月22日の聖徳太子の命日にその遺徳をしのぶ行事で、現在は４月29日の祝日におこなわれています。地元では「お太子（おたいっ）さん」として親しまれています。

会式では、本堂内での法要の後、境内に設けられた特設の投げ台からゴクまきがおこなわれます。とくに「カサゴク」と呼ばれる一抱えほどの円盤状の餅が投げられると、たいへんな奪いあいになることから、「けんか祭り」の異称もあります。

カサゴクの奪いあい

同じ比曽地区では、11月の亥の日（現在は第1日曜日）新婚の夫婦を祝う子どもたちが主役の行事があります。これを「いのこ」と呼んでいます。

当日の夕方、子どもたちが待ちあわせて新婚の家へ向かいます。手にはタタキワラと呼ばれる、ワラ束のなかにキツネノカミソリ（ヒガンバナ科の植物）や畑の作物を詰め込んだものを持ちます。新婚宅の前で子どもたちは、タタキワラを振り回して地面に打ちつけ、次の歌を歌います。

こ～このよめさん　いつもろた
さんがつみっかの　あさもろた
い～わしさんびき　さけごんご
しんまいわらで　いわいましょ

いのこ

山の神でもあるイノシシの多産と、その子（いのこ）の元気さにあやかって、丈夫な子どもがたくさん生まれますようにという願いが込められた行事です。

⑤地蔵盆（増口）　8月

町内各地でおこなわれている夏の行事のひとつに、地蔵菩薩の縁日（24日）を祝う「地蔵盆」があります。

かつての伊勢南街道に沿う増口地区でも、当日の夕方になると、家々の軒先にあかり（提灯）が灯されます。

街角の地蔵さんの祠には収穫された根菜類の供物がささげられ、地蔵詣りをする子どもたちにはお菓子が配られ、ふるさとへ帰って若い人達も集って、通りはひと時のにぎわいを取り戻します。

かつてこの増口地区にも、提灯作りの名職人がいました。今はその技も絶えて久しいですが、その伝統の技を伝える道具一式が、地区にある町立杉本記念文化センターの「歴史展示室」で公開されています。

増口の地蔵盆

⑥柳の渡し祭（北六田）　3月

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録された大峯奥駆道の修行場・七十五靡。その最北の靡が、北六田地区にあります。吉野川を舟で渡るため、平安時代に修験道の高僧・聖宝が設けたという「柳の渡し」で、国道沿いに立つシダレヤナギと石灯籠の眼下に、かつて渡し場がありました。大正８(1919)年に美吉野橋ができて、渡し舟も姿を消しましたが、この川辺で禊をし、心を洗った人々の歴史を伝えようと、3月最後の日曜の午後、「柳の渡し祭」が盛大におこなわれています。

川べりに吹き流しがひらめくなか、ヤナギの樹下で修験者による祈祷・護摩焚き、ゴクまきがおこなわれ、吉野川に春の風を迎え入れます。

護摩焚き

柳の渡し

おおよど民俗行事マップ

（○番号は解説に対応。行事の日程は変更されることがあります）

⑧オカリヤ建て・オワタリ（佐名伝）　9月

佐名伝地区の秋祭（第４週目の日曜日）では、一週間前に御霊神社の氏神をトヤ（当屋：その年の行事の世話人）の家におむかえし、まつる風習が続いていました。このおむかえ用の仮祭殿を「オカリヤ」と呼び、今ではこのオカリヤを、地区の公民館の前に建てて行事をおこなっています。オカリヤの真ん中にヤシロを設け、そのうえにフングリ（カマス、白米、塩の入った袋を下げた榊）をつき立てます。この榊が神社から降りて来る氏神のよりしろです（左上イラスト参照）。

一週間後の祭の当日、オカリヤの氏神を神社へと送る行事は「オワタリ」と呼ばれています。

神主の後、榊と御幣をかかげたトヤに続き、人々が行列をなして神社を目指します。氏神が本殿に戻るとその前で神事、ナオライ、ゴクまきがあり、来年のトヤに行事の引き継がおこなわれます。

オカリヤ前での神事

⑦畝火山口神社の水取り神事（土田）　7月

毎年7月26日の午前、橿原市の畝傍山の麓にある畝火山口神社から土田地区へ、吉野川の水を汲みにくる行事があります。これは、「畝火山口神社の水取り神事」と呼ばれています。

畝火山口神社の宮司は、地元土田地区の人々が見守るなか、土田神社の境内社（住吉神社）で祝詞をあげてから、国道169号線と近鉄吉野線の線路を横切って、大ケヤキの樹下の川辺に設けられた水取り場に下り、水を汲みます。汲み終わった水は一升瓶に詰められ、畝火山口神社へと持ち帰られます。この水は、７月28・29日に同社でおこなわれる夏越の行事（デンソン祭）のご神水として使われます。

国中（大和盆地）の畝傍山と吉野川、奈良県を代表する山と川をむすぶ珍しい行事です。

水取り神事

土田の大ケヤキ

⑨牛と馬のトンド（今木）　12月

今木地区では、小正月に行われるトンドとは別に、「牛と馬のトンド」と呼ばれる、個人の家で受け継がれてきたトンドの行事があります（表紙イラスト参照）。

大晦日が近づくと、トンドのワラ束と、ワラ細工の牛と馬の作りものを準備します。牛と馬の作りものは、新米のワラを使って作ります。ワラの穂の方を尾っぽにし、根っこの方を頭にします。牛のほうはずんぐりしていて、脚を短く、馬のほうはすらっとしていて、脚を長く作ります。

トンドは高さが２m、径60cmほどで、葉のついた竹数本を支えに、ワラや豆殻をまきこんで作ります。

夕方になると、台所で牛と馬に灯明をあげ、一年の感謝を捧げた後、トンドと牛・馬を今木川を渡った田へと運び、牛・馬をトンドにぶら下げて火をつけます。

その後、火が自然に消えるまで、ゆっくりとトンドをもやし続け、大晦日の夜をむかえます。

馬（左）と牛（右）